

「安全・安心」をベースとした人主役の品質管理



積水化学工業(株) 顧問 (兼)
(株)NTT データセキスイシステムズ 代表取締役社長
近藤 賢

メダルラッシュで日本中を興奮の渦に巻き込んだ2016年リオ五輪、パラリンピックは幕を閉じました。日本選手が活躍する国際的なスポーツの話題は、私達に大きな勇気を与えてくれました。2020年には東京オリンピックも開催され、大いに盛り上がることと思います。夢と目標に向かう選手には感動を覚え、人間の能力の限界に挑戦し克服していく姿は、力強いものです。

さて、国内の品質レベルに目を向けるとどうでしょう。残念ながら、新聞やニュースに取り上げられているように、品質に関しての不祥事は後を絶ちません。

我が国は品質立国です。品質立国だからこそ、日本の品質を見直し、日本の持ち味を活かす「品質向上」の取り組みが不可欠なのではないでしょうか。そのためには、日本品質管理学会がイニシアティブを握り、活動の幅を広げる必要があります。

私が支部長を2年務めさせていただいた関西支部の正会員数の減少傾向は止まらず、現在335人(5年前=383人)となっています(学会全体5年前=2453人→現在=2043人)。支部としても、根幹となる「学」の会員数を増やす活動が必要だと感じます。

学会活動を理解いただいた企業様の新規入会で、何とか5年前の16社を維持してきた賛助会員についても、支部全体で、より精力的な勧誘アプローチを強化しなければならないと考えています。

これまで、支部ならではの特色を活かし、会員サービス事業として、シンポジウム、講演会、QCサロン、事業所見学会や研究発表会を企画し推進して参りました。特に、2年間は、「グローバル化の中で我が国企業に求められる人づくり」、「元気なゲンを創るための視点」というテーマに代表されるように、“人づくり”に取り組みました。これからも

重要な課題だと考えています。

「学」の研究成果を品質経営の推進に活用する「産」も重要な位置付けと再認識し、活発化の方向に導くことも大事です。例えば、滋賀大学のデータサイエンス学部創設の際にも連携活動を行いました。今後も積極的に「学」との連携を図って参ります。

一方、学会関西支部長と同時期に、QCサークルの近畿支部長も兼任させていただきました。関係する皆様方のご尽力により、2015年度品質月間テキスト「QCサークルの10の力」を発信する等、目に見える活動の成果も得られました。

学会とQCサークルの活動は、それぞれの位置付けが異なり組織的な運営も違いますが、目指す方向は共通点多くあると思います。JSQC規格「小集団改善活動の指針」を提供する等、今後も、相互を繋ぐ取り組みも進めていきたいと思っています。

今後の社会は、ますますAIが進化し、自動化革新も期待されます。今年の夏、日本でも配信されたポケモンGOのようなバーチャル・リアリティ技術の展開にも関心があります。その高度な技術を扱う人間としての大切なキーワードの一つは、やはり、「安全・安心」ではないでしょうか。

私は、社内には常日頃から、「安全無くして品質なし! 安全と品質無くして生産性無し!」というスローガンを発信し続けています。これは、製品・サービス、どの分野にも共通のメッセージだと考えています。

学会関西支部においても、「安全・安心」をベースとして考え、自社(自ら)の品質に対して責任を持ち、より向上させるための挑戦を継続して参ります。

より明るい未来を迎えるためにも、頑張っている人が報われ、活気づかせる文化を築きたいものです。